

次に、9番、下道議員の質問を許します。

9番、下道議員。

○9番（下道英明君） 本日、最後の一般質問でございます。皆様、本日も長丁場、もう少しでございますので、御答弁のほどよろしくお願い申し上げます。

これから、通告順に従いましてお伺いさせていただきます。

今回、一般質問の大きなテーマ、交流によるまちづくりへの模索でございます。

一つ目は、地域との交流によるまちづくりでございます。二つ目は、教育機関との交流によるまちづくりでございます。三つ目は、スポーツ交流によるまちづくりでございます。交流という、人と人とが接触し、コミュニケーションすることではありますが、この交流を生み出すきっかけが観光であると考えております。この基本スタンスから、一般質問をさせていただきます。

最初に、地域との交流によるまちづくりの視点から、北海道登別洞爺広域観光圏についてお伺いしてまいりたいと思います。

昨年、私は、昨年の6月の定例会におきまして、たまたま4月ですか、観光圏が見送られたことによりまして、行政の垣根を越えた従来の胆振地方の観光圏だけではなく、後志地区のニセコ羊蹄エリアを含めた北海道登別洞爺ニセコ観光圏を提唱させていただきました。

しかし、昨年、皆様の御努力によりまして整備計画が修正案を昨年10月まとめ上げられまして、2年連続、認定の見送りもなく本年4月、無事認定されましたことは関係者各位に対して、大変、御努力したなと評価しております。

その中で地球とのコミュニケーション、火山文化とアイヌ文化を世界にとのキャッチフレーズの修正版を読ませていただいているのですけれども、洞爺湖町を含め、観光圏3市4町を、この3市4町がどのように大きなマクロ的な意味合いで集客の観光客の滞在時間を延長させていく、そういった事業をこの一、二年の間で、どのようなビジョンを持って取り組まれるのかお伺いしたいと思います。

○議長（千葉 薫君） 佐々木観光振興課参事。

○観光振興課参事（佐々木清志君） ただいまの質問でございますけれども、昨年来、西胆振戦略的観光協議会というものがございまして、新たな組織としまして観光圏というお話が出てきてございまして、ことし北海道で6番目に認定をいただきました。

認定を受けて、これからどうなるかということでございますけれども、先ほど議員もおっしゃいましたように、滞在型、2泊3日以上滞在型観光地を目指し、集客増を促進するということでございまして、各種補助事業の活用や旅行業法の特例措置というものが受けられることになります。

また、この加盟しております市町村が独自に白老 から、こちら豊浦まででございます

けれども、独自に取り組んできました国内外の誘致活動についても単独に行うことなく、連携をし、費用を削減して、効果のあるものにしてまいりたいというふうに提起してございます。

この一例としましては、昨年は加盟市町村全トップセールス、中国国内の友好都市を持っているところがございます、中国のにっしょう市、伊達市のふくしゅう市、洞爺湖町も昨年来、交流しておりますこうざん市という形で、広い範囲でPRがなされてきたということの実績もございます。

今後でございますけれども、平成22年から26年の5カ年計画でございます、これから国内の誘致PR事業を促進するための媒体、DVD政策、観光圏の共通パンフレットの政策、そのほか、修学旅行で大変、本州の学校からも興味を示されております白老のアイヌ文化での活用等が注目されているものであります。

また、今回、震災がございまして、事業内容を一部変更して、登別・洞爺のお泊まりいただいた道内客の共通キャンペーン「ふたび」というものを出しております、登別及びこの7町村が中心となりまして、登別洞爺湖でございますので、事務局は登別でございますが、連携し、洞爺湖町も中心となるべく協力してまいりたいと。

また、この地域でございますけれども、皆さんも御存じのように千歳空港近くでございます、北海道の玄関と言われております。空港に近いこともありまして、今後、北海道観光の窓口となるよう、道央部会という札幌も含めましたこの地域がございますけれども、北海道観光を経由するではないかという期待を持たれております。

また、議員おっしゃいました今後4年間というのが、この地域でございますけれども、このようなことをしていくのかというような、若干ございましたけれども、当面の課題、例えば滞在型の時間を延ばすという問題でございますが、登別温泉から洞爺湖温泉に来るのに大変、所要時間がかかります。その真ん中には室蘭市がございまして、室蘭市は夜景観光を進めていると、これらの町の意見を取り入れた中での交通網の整備、周遊バス、そういうものも今後、検討していくということで、詳細については今後、幹事会の中で詰めて、積極的に洞爺湖町もこの観光圏で努力していきたいというふうに考えてございます。

以上です。

○議長（千葉 薫君） 下道議員。

○9番（下道英明君） 御答弁ありがとうございました。

昨日の町長の行政報告にありましたように、フラワーマダムの会北海道ツアーがありまして、6月3日か4日でしか、ちょうど在日大使と大使婦人が登別洞爺広域観光圏で、胆振地域の観光地を点と点ではなくて、やはり面と面というのですか、そういった形でとらえて域内の安全・安心を確認していただきました。

これは、大変素晴らしいことで、こういった行政が観光振興策として、今回、VIPを待遇したわけなのですけれども、VIPだけではなくて、一般観光客もこの広域観光圏を点と点ではなくて、今、参事がおっしゃったような形の室蘭の例えば夜間の工場ツアーですとか、

あるいは壮瞥町のフルーツ、あるいは豊浦町のイチゴですとか、そういったものを混ぜ合わせたコラボレーションの形で、点と点ではなく、面と面で観光をアピールしていくと、そういう中で、ぜひこれは認定されたばかりですので、なかなか民間業者が横の連絡、観光協会同士が連絡取り合うということは、非常に難しいというのですか、ある面ではお客さんを奪い合う曲面も出てまいりますので、そういったところでぜひ行政のお力を借りながら広域圏を進めていただきたいと思います。

特に、この観光圏認定というのは、行政単位で独自に関係していましたが、一つ、例えば広報のPRですとか、あるいはサイン標識ですとか、また、歴史文化の造成事業などは、各自治体単体で行っていたと思うのですが、こういった認定を受けることによって、登別洞爺地域の魅力が一層高まって、また質の高い観光地へ脱皮できるすごいいいチャンスだと思うのです。

そういった面で、真屋町長、この広域観光圏の認定に伴いまして、当町だけではなくて、この3市4町の、今、事務局は登別にございますけれども、本来ですと真屋町長が本当、ひっぱり、先ほどのジオパークのお話ではありませんけれども、ダブルで会長をやるぐらいの気持ちでやっていただきたいと思いますと思うのですが、そういった観点から、この一、二年、計画的には三、四年でございまして、真屋町長のこのビジョンというのを聞かせたいと思います。

○議長（千葉 薫君） 町長。

○町長（真屋敏春君） この間の行政報告もさせていただきましたフラワーマダムの会、こちらのほうに登別、そして洞爺湖温泉に泊まらせていただきまして、登別では全員の方が参加できなかったようですから、私どもの町で、いわゆる歓迎のパーティーをさせていただいたと、そのときにお一人ずつ御紹介をさせていただいたという部分がございまして、中に中国の大使婦人がおられました。

私どものほう、特にということではないのですが、中国の御婦人のほうに洞爺湖のよさを十分、PRさせていただいたかなというふうにも思っております。お帰りになった後、すぐ鉾山のほうからたいへいこう領有局というのですか、そちらのほうから電話がありました。周局長さんからですが、近々また北海道のほうに行きたいというお話も承っております。

そして、6月19日には、中国の旅行関係者、旅行会社の方々が、やはりこの日程の登別洞爺広域観光圏の一環のスケジュールで、私どもの町のほうに入ってきてくれることになっております。洞爺湖畔のいわゆる船上で私ども、またPRをさせていただくことになっております。こういう機会をぜひ、とらまえながら私どもの町をPRしていきたいというふうにも思っております。

それと、私どもの町だけでなく、やはりこの広域観光圏ですから、今、議員おっしゃられましたとおり壮瞥の果物、あるいは豊浦のイチゴ、あるいは豚肉ですとか、室蘭の夜景ですとか、伊達の藍染めですとか、そういうものと連携しながら、この地域のよさを発信して

まいりたいと、それが次のリピーターにつながってくるかなというふうに思っておりますので、その辺は十分、これから心して進めてまいりたいというふうに思っております。

○議長（千葉 薫君） 下道議員。

○9番（下道英明君） 御答弁ありがとうございました。

ぜひ、その思いで大きなマクロの視点で観光行政を進めていただきたいと思います。

次に、この大きないわゆる鳥の目が見たのが大きなマクロだと思うのですが、今度は虫の目というのですか、小さい目、我が町に関連した形でお伺いさせていただきたいと思いますけれども、6月現在、先ほど参事がおっしゃっていましたように、北海道には当町、今回の広域圏を含めて5カ所ございます。それは函館観光圏、札幌広域観光圏、富良野美瑛広域観光圏、釧路湿原、阿寒、摩周観光圏でございますが、この五つの地域との差別化というのがこれからまた急務になってくると思うのです。北海道の中でも、やはり旅行に来るということは、道内観光客はもとより、道外観光客がどのエリアを選んでいくかという、その点を認定されたからといって、さらにそれからが今度は勝負だと思うのです。これが今、スタートラインというふうに考えております。

きょう、北海道新聞のちょうど朝刊にございますが、観光振興を目指して新組織を発足と、体験型広域連合で企画ということで、室蘭・白老も独自にもう既に動いていくとっている状況でございます。また、今、観光圏の認定された中でのメリットというのが幾つかあると思うのですけれども、先ほどありましたように認定観光圏の案内所ですとか、あるいは国際観光圏ホテル整備の特例ですとか、また、ファイナンスとしては農産業の活性化プロジェクトの支援交付金ですとか、宿泊施設の設備にかかわる貸し付け制度、いわゆる財調を使った形だと思うのですが、やはり一番注目がされるのが旅行業法の特例ですよ。

この朝刊の記事に出ているのは、いわゆる着地型だと思うのですけれども、これは民間だけではなかなかできないと思うのですが、この着地型旅行業法と、また共通乗車専権ですか、これもあります。これは、複数の運送業者が共同で割り引き私有権を発行していくと、またもう二つは道路運送法の特例ですとか、あと洞爺湖の場合は基線を抱えておりますので、基線がありますので、海上運送法の特例ですとか、こういった形でいろいろな表に出ないような形の特例法があると思いますので、こういった中で町としては洞爺湖町独自の形として、こういう述べた認定された利点をどの分野に重点を置いて、地元産業の活性化を図っていくのかお伺いしたいと思います。

○議長（千葉 薫君） 佐々木観光振興課参事。

○観光振興課参事（佐々木清志君） ただいまの件でございます。

先ほど議員もおっしゃいましたように、観光圏整備法に第12条にございまして、旅行業法の特例というのが一番、重要なポイントでございます。これは何かと言いますと、観光圏内、登別、白老から洞爺のこの圏域で、代理旅行業を営むと、着地型商品の販売企画も含まれております。

現在、先月でございますけれども、各ホテル宿泊者施設等を対象にした説明会を開催して

おりまして、その後、近々でございますけれども、観光圏内の旅行業取り扱い管理者養成研修会というものが開催されます。

現在、洞爺湖温泉では観光協会が中心となり、今現在ですけれども泊食分離、1泊2日、朝食はホテル以外でというのも取り組まれておりますけれども、この観光圏の中では2泊3日以上滞在ということもうたれております。これは、登別に宿泊し、洞爺湖も1泊ずつして帰るということもございますし、札幌と共通したもののプランも出ます。

ただ、洞爺湖温泉で2泊3日以上長期滞在を推進するに当たり、現在、観光協会のアウトドア委員会とも協議してございますけれども、1泊をホテル、1泊を宝田、月浦のアウトドア施設、これははっきり言いましてキャンプ場でございます。この地域に2泊していただくためには、やはり自然体験活動、カヌーや乗馬、それらの重要な施設を活用しなければならないと考えておりまして、観光協会のホテルだけで取り組めるものだというふうには理解してございません。

この観光協会のホテル、旅館組合等が商品を開発するに当たりましては、地域のアウトドア、自然、また飲食店組合、こういうものとも連携しながら観光協会が中心となり、観光関連事業者が一体となった新しい商品を提供していかなければならないということで、早急に検討しているところでございます。

以上です。

○議長（千葉 薫君） 下道議員。

○9番（下道英明君） 今、御答弁の中で新しくいろいろなアイデアがあると思うのです。

先ほど、4番議員が言っておりましたように、ジオパークとの関連ですとか、そういったいろいろな着地型の中で、いろいろな組み合わせがあると思うのですけれども、残念ながら観光を通じた振興策の中では従前型というのですか、商工会が商工会、飲食店なら飲食店、宿泊施設なら宿泊施設、そしてまた、農業関係者は農業関係者。あと、漁業関係者は漁業関係者という形で、個々に情報発信していくというのが残念ながら現状に近いと思うのです。

そして去年、コンソーシアムという言葉を使ったと思うのですけれども、いわゆる組織形態を一つにして情報を発信していくと、それをまとめるのが観光協会であると思うのですけれども、残念ながら観光協会というのは、例えば当町の観光協会にしても、やはり洞爺湖周辺だけとか、周辺というか洞爺湖温泉だけというふうに軸足が置いているようなところがございます。

そういった点で、従来型の観光協会という役割というのは、残念ながらいろいろな全国の地域の状況をチェックしている中では、そろそろ終わってきたというのですか、こんな言い方をしたら失礼ですけれども、役割がかなり終わってきて、新しい形態の観光協会というか、そういったシステムを構築していかなければいけない、そういう中で、それが独自にできればいいのですけれども、こういった3・11が終わった後、アフター3・11からやはり冷え切った中で、リーマンショックよりもしかしたら厳しくなるかもしれない、長丁場になっていくかもしれない。そういったところで観光業という、あるいは観光振興活性化という取り組み

の中で、果たして独自にひとり立ちができるのかという形を考えると、これは行政がある程度サポートしていかなければいけない、そういった点でたまたま調べていくうちに、官公庁のほうで、平成23年度観光地づくりプラットフォーム支援事業の2次募集を開始していると、これはもう御承知かと思うのですが、これは今回、当広域圏観光には認定されませんけれども、いわゆるこの観光地プラットフォームの形成化というのはワンストップということだと思うのですけれども、これが非常に大切になってくると思うのです。

それで、地域の資源を活用した着地型旅行商品の企画販売、また市場と地域のワンストップ窓口と、こういったものを官公庁のほうも推進していきたいと、これはいわゆるコンソーシアム、やはり今までの個で動いていたところではなくて、やはり一つにまとまってやっていかなければならない、そういうシステムづくりを今、行政の上のほうでやっている、そういった中で洞爺湖、非常に歴史の古い観光地でございますので、これはもうどんどん先取りしながらやっていきたいと思うのですけれども、今回はこのワンストッププラットフォームのワンストップについては無理でございますけれども、これから町長も政策予算等も出てくる中で、業態が旅行業者、あるいは旅行者の一体化した情報発信ができるようなワンストップという窓口を庁内でも設けられないのか、当然、人数は今、非常に役場の職員も縮小しておりますけれども、その中でこれはボランティアの人も入れていいと思うのです。以前、新しい公共という言葉を使いましたけれども、やはりNPOですとか、あるいはボランティア、本当に実際はボランティアとしてやっていきたいという方もたくさんいらっしゃるのです。

これは、必ずしも町内だけではなくて、やはりこの広域観光圏の中でそういう、では洞爺湖に応援しようではないかとか、そういう人、有志もいらっしゃると思うのです。そういった人たちとのコミュニケーションをとりながら、やはり町内独自のワンストップ窓口というのを、せっかくビジターセンター、観光サミット館ありますのであんなところを利用しながら、プラットフォームの支援を独自の構築ができないのかなと思うのですが、そういった取り組みについていかがでしょうか。

○議長（千葉 薫君） 佐々木観光振興課参事。

○観光振興課参事（佐々木清志君） ただいまの件でございますけれども、私どもも日ごろから思っていることでございますけれども、今の旅館、観光事業者だけでは新たな商品というのはなかなか生まれないというふうに私も判断してございます。

これは、やはり例えば観光協会の中でもアウトドア委員会といいまして、現在、大変若い方が町外からここ数年入ってきた方、例えばガラス食器屋さんですとか、乗馬さんですとか、最近でいいますと協会の方も大分、役員も若くなってきておりまして、これらの商品については洞爺湖町だけではだめなのです、やはり。旧洞爺地区の方でカヌーをやっている方、新しく店を出された方、食事の面でも新しい商店も何店か入ってきております。豊浦町においても、自然体験の軸というか、アウトドアの方がおります。

これらの意見をすべて網羅し、それらである魅力ある商品がある程度1点、2点ではなくて、先ほど委員おっしゃいましたように事業も含めまして、魅力ある商品をたくさん形成し、

それを先ほどもきの道の登別地区の話出てございましたけれども、それらとまた連携していき、この地域を活性化していく、そのためにはやはり私ども観光課でございますけれども、それには全面的に協力していき、何とかこの地域を集客増してまいりたいということで努力は惜しまない次第でございます。

○議長（千葉 薫君） 下道議員。

○9番（下道英明君） 先ほど、マクロについて町長のほうにお伺いしたのですが、今度はミクロというのですか、洞爺湖町に関して今、お話したような、いわゆるプラットホーム、ワンストップ窓口、こういったものというのはことしすぐつくるとか、そういう話ではないと思うのですが、いずれにしても今後、広域観光圏を發展させて、また道内の観光圏との差別化、そしてまたこれからあるインバウンドの中で外国観光客を組み入れいく中で、やはり差別化していく中で、大きな連合体として動いていくのは当然なのですが、現実問題としてやはり登別、洞爺湖を2泊するというのはなかなか難しく、やはりどうしても道東に飛んでしまうとか、実際に今、バスの運転手さんなんかに聞きますと、函館に入って1日で札幌に行ってしまうよと、千歳に入ってももう根室まで行ってしまうよと、そんな感じなので、宿泊型というよりは現実問題としては通過型になっているのです。それをやはり引きとめていくということになってきますと、この広域観光圏の中で、やはり差別化というものを真剣に取り組んでいかなければいけない、それは今までの既存のものだけではないと思うのです。やはり観光協会だけではなくて、そういったワンストップ型、せっかく本町地区にもホタテもありますし、例えばホタテの海釣りを観光客に見せるですとか、あるいは農業関係のファームに指定してもらおうとか、そういったものはやはりワンストップ、どうしても観光協会は温泉ですとか、あるいはホテルですとか、そういったことを気にかけてながら動いていくわけですが、やはりもっともっと大きな高い次元の中で、この洞爺湖町の観光をもっと広げていこうとか、そういった観点から考えると、行政もをつくるわけではございませんけれども、やはりワンストップ、一つの窓口というのはこれから大きな作用がされてくると思うのですけれども、町長ひとつこの二、三年以内にそういった仕組みというものを御検討いただけないのか、そういうことをお伺いしたいと思います。

○議長（千葉 薫君） 町長。

○町長（真屋敏春君） 最終的に、そういうふうな形ができるのが一番、私も望ましいと思っております。

ただ、今、洞爺湖温泉の観光業者の方々に私ども今、お願いしているのは、とにかくにも洞爺湖温泉が一体化にならないといけない、皆さんが連携できるような状況にならないといけない、そして今、介護等でいつも言わせていただいておりますけれども、洞爺湖温泉におもてなしとサービスの向上とお料理の資質の向上を高めていただく、これは何とかお願いしたいということで、今、訴えているところでございます。

今、ワンストップ観光サービス、これは本当にこの地域というよりも、私どもの町を中心にして、例えば果物狩りだとか、あるいは海釣りだとか、そしてお泊まりは洞爺湖温泉にお

泊まりをしていただくというふうなものをぜひ目指していきたいというふうには思っております。

ただ、その中でやはり何回もくだいようですが、洞爺湖温泉の業者さんの連帯感というか、皆が協働でできよというふうなことを何としても強めて、そのためのまず努力をしてまいりたいというふうに考えております。

○議長（千葉 薫君） 下道議員。

○9番（下道英明君） ありがとうございます。

連帯感、そうですね、私も微力ながら連帯感を醸し出せるように土曜、日曜、マンガアニメフェスタ、7時半から頑張って手伝ってまいりたいと思います。

それでは、次のほうの質問に進ませていただきます。

○議長（千葉 薫君） 下道議員、ここで休憩をとります。

10分間、休憩をとります。

開始を25分とします。

（午後 4時16分）

○議長（千葉 薫君） それでは、再開をいたします。

一般質問を続けます。

（午後 4時25分）

○議長（千葉 薫君） 9番、下道議員。

○9番（下道英明君） それでは、続きまして教育機関等の交流のまちづくりについて、二つ目の大きな柱に関連いたしまして質問させていただきます。

2009年にちょうど洞爺湖町と酪農学園は、地域総合交流に関する協定を調印いたしました。当時の資料を読みますと、前町長が環境面のみではなく、産業面も含めた大学の持つ専門的知識を地域活性化につなげたいとコメントしております。また、酪農学園の学長のほうからも、洞爺湖サミットを機に、自然環境への注目がある、本学学生の貴重なフィールド調査の場として洞爺湖を活用させていただきたいという形が出てきております。

私は、昨年旧鳴川小学校の引き渡し式の後、学校のほうに行きまして、またことし4月の旧鳴川小学校で行われました新入生のオリエンテーションにも参加させていただきました。ちょうど、4月に行われました新入生オリエンテーションでは、学生職員がちょうどオリエンテーションをし終わった後にG8サミット記念館を視察したり、洞爺湖温泉に宿泊し、また翌日は鳴川小学校のほうで研究室ごとに研究紹介を行っております。

もうこの時点で、既に学生と地域とのいわゆる地域活性化がなされてきていると思うのですが、もう調印が終わって1年ちょっとたっているわけなのですが、1年有余が過ぎておりますけれども、当町と酪農学園の交流実施状況というのを改めてお伺いしたいと思います。

○議長（千葉 薫君） 大西企画防災課長。

○企画防災課長（大西康典君） 酪農学園との地域総合交流協定にかかわる交流活動の実施状況ということでございます。

今、議員もおっしゃいましたけれども、洞爺湖町と酪農学園との間で地域交流の協定につきましては2009年から3年間ということで協定を行っているところですが……失礼いたしました、協定における主な総合交流事業については、酪農学園では洞爺湖保全、自然環境調査、これについては外来生物の駆除、エゾシカ調査、水質調査と、また、生涯学習、国際交流の実践と、町におきましては教育研究の多面的なフィールド、洞爺湖での研究支援、廃校の利用、各種イベントの案内等の支援ということでございます。

特に、主な研究課題につきましては、外来生物ウチダザリガニの効果的な防除手法の開発、洞爺湖中島のエゾシカが生物等へ与える影響、洞爺湖の基礎的な水質科学調査ということでございまして、具体的には洞爺湖生物、多様化生物保全協会、所管産業課でございしますが、また社会教育課などと連携した取り組みということでございます。

今の2010年の交流活動の実施状況についてということで御答弁させていただきますが、文部科学省、大学教育学生支援推進事業の支援を受けまして、大学教育推進プログラム洞爺湖フィールドにおいて、一つ目には生命環境学科新入生合宿オリエンテーションを実施しております。内容につきましては、洞爺湖ビジターセンター、火山科学館で環境省の勤務する卒業生からの有珠山など、自然環境と環境省の取り組み、また洞爺湖に成育するウチダザリガニの防除活動の説明、捕獲したウチダザリガニの体長等の計測等の実習、水質調査の実演、中島エゾシカの調査、体験など行っております。

二つ目には、環境教育活動ということでございまして、洞爺湖温泉中学校の総合学習時間での出張授業、世界子供水フォーラム、フォローアップ委員北海道参加、これは洞爺少年自然の家で開催されております。水に関する活動の発表を行っているところでございます。洞爺湖元気ZZ、これは洞爺湖町の教育委員会の主催で環境教育での講師となり、洞爺湖野生生物について子供たちに指導を行っております。

2011年、洞爺湖生物多様性フォーラムの開催を行っておりまして、このフォーラムにつきましては町民に広く報告ということでございまして、洞爺湖の水質と中島における土壌、食性の問題、またアライグマ生息調査と中島におけるエゾシカ、他生物への影響、エゾシカ調査と洞爺湖ウチダザリガニ防除活動と、この本学会の学生による調査研究の成果を地域住民に報告をして、地域住民の雇用を直接聞く、貴重な機会となっているということでございます。

三つ目には、旧鳴川小学校の整備と活用ということで、旧鳴川小学校施設引き渡しセレモニー、また学生と地域住民、子供たちの交流、また環境整備、意見交換など、本学、大学との親交を深めているという活動の内容でございます。

2011年におきましても、本プログラムの推進に取り組むということで、地域活性化や環境保全につなげていくとともに、調査研究を通じて学生のさらなる教育効果の向上を目指しているということでございます。

○議長（千葉 薫君） 下道議員。

○9番（下道英明君） ありがとうございます。

時系列で実施状況というのを御報告していただいたわけですが、私が一つちょっと心配しておりますのは、危惧しておりますのは、洞爺湖町として例えば旧鳴川小学校を整備して、言いかえますと箱物を渡してあとはどうぞ使ってくださいという形ではなくて、やはり、今のお話を聞いていますと、一部の中学校ですとか社会教育の一環で少しだけ環境教育を実施しているというのが実際の現状ではないのかなと思っております。

そういう中で、23年度教育行政執行方針の中で、酪農学園と連携を図りながら環境問題や地域学習の機会を提供していくと、先般、教育長のほうからお示しがありましたが、酪農学園自体は、北海道内の自治体ともかなり協定を結んでおります。

一つは、釧路管内の浜間中町、あとは空知管内の栗山町、オホーツク管内の滝上町、それと西興部、こちら辺で協定を結んでおります。そして一部、現況を確認したところ、特に学生がこの協定を結んで、学生が地域活性化をしている事例として、一つは農家にホームステイする農家ステイ、この中で都市部にいる学生が農村地域に足を運んで地域の生産者と学生の相互理解が深まったと、そういったコメントが出てきております。

また、幅広い方にその西興部ですとか、あるいは滝上ですとか、栗山町の町民の皆さんを学生職員が相互理解していただいていると、また単なるイベント参加も多いのですけれども、学生がいることによってにぎやか、華やかになってきていると、そういったお話が聞かれました。

また、大学教員や学生が通常の小中学校のカリキュラムではなくて、体験しがたいテーマ、今回ですと例えばウチダザリガニですとか、あるいはC o 2の洞爺湖の水質調査ですか、ああいった吉田準教授がいらっしゃる中で、生徒指導をしているわけなのですけれども、そういった中でそういった文科省の学習指導要項要領にない学習支援を大学側がしていると。

そしてまた、継続的かつ一貫したテーマでの生涯学習というのも、酪農学園が今回、協定を結んでいるところとも地域住民の啓蒙にも役立っているというところがございました。

そういった中で、当町の協定を結んでからどれだけその協定を締結して、交流を盛んにしているのかな、当然、せっかく協定を結んだわけですから、費用対効果ではございませんけれども、やはり少ない費用である程度の効果が認められると思うのです。

ただ単に、旧鳴川小学校サテライトで使ってくださいということだけではなくて、それ以降、やはり江別のほうから学生が来るわけですから、それは当町にとっては地域交流の増加の形になると思うのです。そういったところで、もっと利用していただきたいと思うのですけれども、今、防災企画のほうでは酪農学園との今後の提携について一層推進していくというお考えはありますか、お伺いします。

○議長（千葉 薫君） 大西企画防災課長。

○企画防災課長（大西康典君） 企画防災課におきましては、この学校との協定等の窓口というところで取り組まさせていただいております。

先般、私も鳴川小学校のオリエンテーション、ことはオリエンテーションの開催があったときには案内をいただきまして、私もみずから行って、この交流の場に参加をさせていただいております。

また、フォーラム開催におきましても、御案内いただいて、参加をさせていただいているということで、今後も企画防災課が窓口になって、この協定の取り組みについて進めていきたいというふうに考えております。

○議長（千葉 薫君） 下道議員。

○9番（下道英明君） 今、やはり地域づくりに関する自治体と大学、いわゆる教育機関との連携については、これは何も北海道だけではなくて関東ですとか関西、九州の中でも積極的に執り行われております。

特に、例えば九州何かでは、いろいろな自治体と大学の連携も行われております。例えば、ワーキングホリデー等を使って、学生が観光着地型ツアーではないですけれども、そういったものを考案しているとか、学部の地域づくり学習の一環として地域イベントに積極的に参加しているとか、あるいは廃校を活用してアートキャンプを実施しているとか、いろいろな形でほかの自治体が教育機関と連携をとっているというのが現状でございます。

そういった中で、一般質問、通告の中にも3点ほど提案という形で書きましたけれども、この質問について進ませていただきたいと思います。全国的に地域づくり、地域活性化の中で自治体と大学との連携が注目されている中で、せっかく協定を結んでいるわけですから、また協定を結んだということは非常に重いものがあると思うのです。これはずっと、これから5年、6年、10年、また学生が二十ぐらいの子が40、50になっても、あそこの洞爺湖は母校と協定したよという形で、そして洞爺湖の自然を見たよとか、これはどんどん大きなりピーターの本当の基本の要因になってくると思うのです。

そういった点で、この協定をさらに進化させていくことができないのかと、そういう思いから質問に入っていくわけなんですけれども、今、学校指導要領も変わりました。ゆとり教育から詰め込み教育に大転換しております。

例えば、具体的にいきますと、数学なんかは今まで平方根、会の公式とかちょっと難しかったやつが、10年前は削除項目だったのですが、昨今ではまた復活しております。また理科なんかのイオンですとかあったのですが、これはもう10年前は削除されていたのが、また復活したり、高校入試自体も従来までの平均点がある程度高いものを差別化していこうということで、裁量問題が4年前から実施されております。

そういった中で、小中学生の環境学習に対する学習時間の駒取りというのがなかなか難しいと思うのですけれども、やはり自分たちの住む地域を広く理解を深めていただくと、そういった中で教育機関と連携が図られないのかなと思ったりもしております。

そういった中で、質問の中で小中学生の環境学習支援、また、町民、先ほどのほかの自治体との連携の中で、町民との連携も広がってきていると、そういう例えば酪農学園の農業、食品、環境の生涯学習講座を開設するなど、これは町内だけではなくて、広域観光圏も利用

して、伊達市の市民が洞爺湖町に来て学園と提携して市民講座を受けるとか、あるいは豊浦町の皆さんが来るとか、あるいは壮瞥町の農家の方が、では学園とちょっとその講座に聞きに来ようとか、何もこの洞爺湖町民だけではなくて、そういった講座を開く、これをどこか例えばホテルで使うとか、いろいろなところで使っていく、そうすることによって、これは集客、一つの観光にもなってくるわけですから、交流というのはすなわち観光の一つだと思っておりますので、そういった点で環境学習、あるいは町民向けの学習支援等、こういう連携が図れないのか、こういった点についてお伺いいたします。

○議長（千葉 薫君） 遠藤管理課長。

○管理課長（遠藤秀男君） 学校関係でございますけれども、昨年、洞爺湖温泉中学校が酪農学園の協力を得まして、水質、それからウチダザリガニの調査を行ったところでございます。

洞爺湖温泉中学校につきましては、今年度も酪農学園の協力を得まして、今年度は禍根に関する調査をしたいということで今、進めさせていただいております。

そういう中で、洞爺湖温泉中学校は酪農学園大学の協力を得ておりますけれども、各学校とも環境教育をやっていないわけではありません。当然、それぞれ今まで何年もかけて環境教育というのをやってきております。例えば、虻田中学校におきましても、昨年は縄文遺跡の関係も含めまして、例えば職務体験の中で発掘調査協力していたとかそういうのもございます。

豊浦中学校も、昨年は洞爺地域の自然を地域を含めた中で学校新聞というのでしょうか、そういうものに掲載していく中で、かなり地域の方々から取材をした形で進めてきたというふうに聞いてございます。

それぞれ進めておりました、虻田小学校も総合的な学習の時間、先ほど議員言われましたように、今年度から小学校は新学習指導要領に移行しまして、総合的な学習の時間がかなり減っているような状況もございますけれども、有珠山の関係につきましてもやっておりますし、それから昨年は町の出張環境教室という形でごみの関係とか、洞爺湖の生物についてもいろいろ調査をしております。

今年度も虻田小学校は4年、5年、6年とそれぞれ総合的な学習の時間を使いまして、4年生は洞爺湖町の環境ということで有珠山とその周辺について火山活動、それから植物、動物などについてビジターセンター等での学習も予定してございます。5年生につきましては、昨年同様、町の出張環境教室というのを行いますし、6年生についても洞爺湖町の自然ということで縄文時代から現在の洞爺湖町までの移り変わりについて、いろいろな形の出前講座を受けながら進めていくと。最終的には、子供たちの現在の洞爺湖町から将来の洞爺湖町はどのようなだろうというような未来への提言ということも考えているようでございます。

また、虻田中学校、今年度は火山マイスターをお願いしまして、有珠山について学ぶ予定ということも考えている状況でございます。また、洞爺中学校におきましても、今年度、異動してきた事務職員が火山マイスターの資格を持っておりますので、これらの方を活用しながら有珠山について学んでいくということで進んでおります。そういうことで、洞爺小学校

も今年度、遠足を 山のフットバスを実施したということで聞いてございます。

そうすることで、各学校独自の観光教育を進めておりますので、なかなか酪農学園大学の全面的な協力というの、学生たちも長期休業期間というのがどうしても主になるのかなと思いますし、学校も当然そのころになると学校も休みということになって、学校としての取り組みはなかなか難しいのかなと思っております。そうするとやはり、社会教育の活動の中で進めていくことも一つの方法かと思っております。

また、その事業協力とかを受けるに当たっては日程の調整とか、当然、費用の関係も出てきますので、その辺、調整しながら教育委員会として学校、それから社会教育、こういう連携を取りながらできるだけ協力をいただいきたいなというふうに考えております。

○議長（千葉 薫君） 下道議員。

○9番（下道英明君） 一般質問の中で何度か、こういう教育関係について環境問題、また特にジオパークですとか、いろいろな形でウチダザリガニにしてもそうなのですけども、たしか質問をさせていただきまして、やはりカリキュラムも になっておりますし、当然、各小中学校も既にそういう実施しているのはわかるのですけれども、今回の質問で上げたのは、ある自治体と教育機関が結んだ協定というのは非常に重いよと、そしてまた、その中で防災、窓口と大学とのコミュニケーションがとれているのかなと、そういったところは、実際に私もそういう点で学園の入試担当者というのですか、広報課ではございませんけれども、やはりそういった点でいろいろな環境学習の中で接する面が多いものですから、そういった点で洞爺湖町とせっかく協定を結んでいるのに、もっともっと密にできないのかなと、そういった思いからこの質問をさせていただきました。できないから、できるへ。ぜひ、もっと進化させていくような工夫を皆様と一緒に考えてまいりたいと思います。

それでは、次に入ってまいります、酪農学園と産業課、これは所管になるかと思うのですが、もっと総合協力の可能性についてお伺いしてまいりたいと思います。

地産地消によります食食物プロジェクトですか、これも継続して料理研究会を中心に赤毛和牛による名物の開発をサポートするというのは、先般、町長の町政執行の中にも述べられておりますけれども、そういった中で、北海道の中で学園とか、こういうユニークな大学というのですか、非常に地元学というのを一生懸命やっているところが少ないと思うのですが、そういった中で、せっかく食品ですとか、そういったこれから学んでいこうという学生がいる中で、せっかくその協定を生かすという面で赤毛和牛の普及など、そういった産学官というのですか、そういった連携が産業振興の可能性として追及できないのかなと、そういう思いでお伺いします。

○議長（千葉 薫君） 伝産業課長。

○産業課長（伝 正宏君） 酪農学園大学につきましては、議員御承知のことと思いますが、道内食品加工の高度化、付加価値を目的に北海道立の食品加工センター、食加研ですね、普通言う。連研と協力に関する協定を締結するほど多くの人材、実績を持つ大学でありますので、今後、加工品や調理について研究調査をお願いして、赤毛和牛だけではなくて、地場残

品ということになりますけれども、それを使った加工土産品、または地場産品の利用促進等に努めてまいりたいというふうに考えております。

○議長（千葉 薫君） 下道議員。

○9番（下道英明君） 学園なんかは、僕もいつも質問で取り上げておりますエゾシカ対策なのですけれども、ここではエゾシカ料理祭り開催ですとか、そういった食に対する意識が非常に強いところでございまして、メニューを考案して、課長おっしゃったような食品開発に対してはかなり一生懸命取り組んでいるところですし、また食品の流通です、流通に対しても実績を上げているところではございますが、単に学生たちのアイデアをメニュー化していくということだけではなくて、商品開発するだけではなくて、そのメニュー開発の打ち合わせをしていくとか、あるいは試作品の試食などを実施していくとか、そしてまたメニュー開発の過程全体について学生を巻き込んでいくと、こういった取り組みというのをすることによって、メディアも乗ってくると思うのです。

現実には、例えば大阪とか京都の学生が、例えば何々学校の生徒がつくった弁当だとか、実際、コンビニなんかはコラボレーションでかなりヒットしておりますので、そういった斬新なアイデアというのを、そういった若い力から知恵を拝借しながらやっていくと、今、当町におきましては赤毛和牛ですとか、地場産品については一生懸命取り組んでいくというのはありますので、そういったところで繰り返しになりますけれども、せっかくそういうコミュニケーションがあるところですから、積極的に利用できないのかなと思ったわけなのです。

その中で、洞爺湖赤毛和牛の存在を知らしめるという中で、ちょうど2週間前ですか、北海道新聞、どの新聞かわかりませんが、赤毛和牛のブランド化を目指そうと牧場主さんが九州、熊本、赤毛和牛普及の協会設立という新聞報道がありましたけれども、実際に当町におきまして、かなり前から赤毛和牛については取り組んでいると思いますが、将来的に赤毛和牛に限りませんが、今、課長おっしゃったような地元地場産品ですね、これをブランドを目指すような形で、試作品を製造するような簡易なプラントというのですか、そのようなものをつくって、そこに学生、必ずしも学園ではなくて、ほかの大学ともし提携ができれば、そういった人たちも入れて、そのプラントをつくって産学官の中で現場での演習ですとか、あるいはメニュー開発を行うような可能性というか、そういうビジョンはないのでしょうか。

○議長（千葉 薫君） 伝産業課長。

○産業課長（伝 正宏君） 今、お話ししました赤毛和牛等、地場産品の利用促進、地産地消ということで、今、今月の末でございますけれども、新しい法人を設立予定でございます。

あわせまして、加工施設等もできるだけ早く持ちたいという考え方でおりますので、そういうような場を活用して、これは地域との交流にもなるとは思いますけれども、そのような施設を利用しながら、地域と大学、学生が一体になって商品開発をする、また利用促進を図るという形で進めていければ理想だなというふうに考えております。

○議長（千葉 薫君） 下道議員。

○9番（下道英明君）　そういうプロジェクトがあるのであれば、ぜひ、そういうどれだけのプラントになるかわかりませんが、ぜひそれを利用して、そしてまたその過程を例えば見れるような形で、それも一つの観光施設になると思いますので、そこら辺のところ、よくわかさいもではないですけども、つくっている過程がわかるとか、研究している過程がわかるとか、旭川の旭山動物園何かを見ると結局、動物だけを見に行くのではなくて、その飼育している人がどんな表情でなっているか、それも楽しみだとか、人間を見に行くということもありますよね。円山動物園は、それを今、意識的にやっております。

ですから、旭山が今、一生懸命、動物の生態を見せていくという形でやっていたけれども、札幌の円山動物園に関してはそれだけではなくて、今度は飼育係がどれだけ苦労しているかと、そういうのも見せていく、それがまた一つ大きな観光資源とか、ニーズになってきているので、そういう点で例えばそのプラントの形が簡易工場みたいな形ができるのであれば、それはその中で赤毛和牛を一生懸命悩んでメニュー化している学生がいたり、料理研究人がいたり、地元のボランティアのお料理好きの御婦人方が侃々諤々やっていると見れると、そういうものが非常に大事になっていくのではないかと思いますので、ぜひ、積極的に取り組んでいただきたいと思います。

それでは、三つ目の質問に入ってまいりたいと思いますが、学園関係の最後の質問になりますけれども、先般、学園の狩猟管理学研究室の先生とお会いしました。その中で、日本で唯一の狩猟管理学研究室を開設ということで、特にこの中ではエゾシカ対策というのですがございます。エゾシカだけではないのですけれども、野生生物の効率的捕獲法やハンターの担い手育成、野生生物の生態調査研究、ハンターの実態把握などの基礎データを収集する云々と出ております。

この研究室の中では、ことし4月に既に開設されておりますけれども、数年前から狩猟免許取得を奨励しておりまして、4月までに既に70名の免許取得者がいるそうです。そのうち、女子の方が20名と聞いておりますけれども、そういった中で、いつも僕は中島のシカ問題ばかり取り上げているのですけれども、中島のシカだけではなくて、洞爺湖周辺のアライグマですとか、あるいはエゾシカ、そういった中でこの駆除、これを今まで何度も質問していても、全然先に進んでいなのが現状だと思うのですけれども、その中でやはり連携できるところはとことん連携して、ある程度、そんな大きな費用はかからないと思うのです。せいぜい、学生のあご足と、実際に鳴川何かの施設を御提供しているわけですから、その移動のほうを当然サポートするぐらいでいいと思うのですけれども、現実には今、この農業被害の中で有害駆除を行う狩猟というのはボランティアですとか、趣味の中でハンティングするという、その域を超えております。

そういった中で、専門家を育成するような研究室があるわけですから、こういったところとの連携の中でエゾシカ駆除、先ほどお話ししたようなエゾシカ肉の活用も入れて、そういった取り組みについて可能性があるのかないのか、お伺いします。

○議長（千葉 薫君）　間もなく、午後5時になりますが、あらかじめ、本日の会議時間を延

長しますので、御了解をいただきたいと思います。

会議を進めます。

伝産業課長。

○産業課長（伝 正宏君） まず、肉の加工の関係について答弁をさせていただきたいと思います。

酪農学園大学とエゾシカ対策、うちのエゾシカ対策についてでございますけれども、実は有害鳥獣駆除にかかるパンフレット、これは北海道といいますか、洞爺湖町のパンフレットをつくっておりますけれども、この作成におきましては酪農学園大学の監修といいますかをいただいて作成しております。

また、狩猟免許の取得等、講習会を開いておりますが、そのときにも酪農学園大学の先生にお出でいただいて、そこら辺のポイントのお話をさせていただいているということで、既に協力をいただいているという内容になっております。

具体的な対策としましては、アライグマの駆除といいますか、これは駆除というよりも、洞爺湖町のアライグマの分布調査ということになりますが、酪農学園大学にお願いをしまして、ことし調査を現在しているところであります。そのような形で指導をいただいております。

それで、有害鳥獣の駆除については余り進んでいないというお話がありましたが、これらにつきましては協議会を設けまして、これは農協さん、それから農業委員会さん、それから農業改良普及センターさんとうちで、駆除のための協議会をつくりまして国から補助をいただいて、基本的には私どもの考え方としましては、農産物被害については被害を受けた農業者みずからが駆除をしていただくということの原則に箱わなですとか、くくりわなを導入しまして、資格を持っている人に貸し出しをして、駆除をしていただくという基本的な方針で、現在、進めております。

また、資格のない方につきましては、資格は取りやすいように講習会等を開催しまして、努めて狩猟免許ですとか、わなの免許を取っていただくような指導をしているところであります。これらの成果が近々出てくればありがたいなというふうに考えております。

それから、酪農学園大学につきましては、今、議員おっしゃられましたように、教育研究機関ではありますが、研究フィールドとしてだけではなくて、地域と連携し、その対策についても指導、協力していただけるということを先生からお聞きしております。

また、酪農学園大学は、中島のエゾシカにかかる環境省の補助事業の研究機関の代表にもなっておりますので、今後、その対策についても相談をして、具体的な検討をしてまいりたいというふうに考えておりますので、少し時間をいただければと思います。

○議長（千葉 薫君） 下道議員。

○9番（下道英明君） ありがとうございます。

少し時間はもうあげられません。とにかく、本当に進んでおりませんので、ぜひ協議会を立ち上げるとかというの、ある面では一つのエクスキューズというか、言い訳になってし

まうとろこがありますので、そこら辺のところはせっかく提携しているわけですから、積極的にお互い相互利用していくという観点から進めていただきたいと思います。

この質問の中で、一番大事なことは地域づくりに関して、やはり自治体と教育機関が連携しているというところは、当町の場合はたまたま酪農学園でございますが、他のところでは多くいろいろなところとコミュニケーションとりながら協定して、やはりよその力を得る、手伝ってもらう、取り組む、取り込む、京都なんかはいい例だと思うのですけれども、あそこはほとんど学生の町ですが、そういったところでいろいろな地域に行きって相互理解をしながら、ある面では京都観光にもつながっているという現状がございます。

例えば、学会誘致をするにしても、例えば1週間とか、学校誘致もあるわけですから、洞爺湖というのはこれから宿泊型というのがなかなか難しくなってくれば、それを変更させていく、学会を誘致するとか、そういう見本型というのですか、コンベンションセンターという言い方をよくしますけれども、この洞爺湖自体が会場になると、そういったことでどんどん自治体と当町と研究機関が連携していけばいいと思うのですけれども、真屋町長ぜひ、酪農学園はさきの前町長との協定でございますが、ぜひ真屋町長のほうでも今回、ジオパーク等もあっていろいろな学者さんも来ますので、当町との関係の中で自治体と教育機関との連携について一つお伺いしたいと思います。

○議長（千葉 薫君） 町長。

○町長（真屋敏春君） いろいろな各大学と連携は、本当にしていきたいなというふうにも思っております。

この間も、ある大学の先生がお邪魔して、何とか洞爺湖町と話を進めてまいれないだろうかというお話も承っておりますので、ぜひ積極的に交流を深めていきたいというふうにも思っております。

○議長（千葉 薫君） 下道議員。

○9番（下道英明君） ありがとうございます。

それでは、あともう一つの質問のほうに移りたいと思いますので、あともう少しでございますので、御協力よろしく願いいたします。

最後の柱でございますスポーツ交流によるまちづくりについて、お伺いしてまいりたいと思います。スポーツ観光の取り組みを強化して、交流機会の拡大を図っていくという中で、洞爺湖マラソン、ツーデーマーチの大会企画運営の来年度以降の将来像をお聞かせいただきたいと思います。

○議長（千葉 薫君） 洞爺湖温泉支所佐野所長。

○洞爺湖温泉支所長（佐野 正君） まず、来年以降の関係でございますが、その前に二つのイベントの関係について今までの経緯といいますか、それをちょっと説明させていただきます。

洞爺湖マラソンにつきましては、昭和50年に第1回大会が251名で開催をされまして、その後、現在のマラソンブーム等もございまして、現在はフルマラソンと10キロ、5キロ、2

キロの4種目で開催をされておりまして、現在、5,500名を超える道内でも有数の大会にまで発展してまいりました。先月、37回目を終えたという状況になってございます。

それから、またツーデーマーチにつきましては、昭和63年6月に第1回大会が開催をされまして、延べ1,219名が最初に参加をされまして、洞爺湖を囲む当時の市町村のコースを回るという企画の中で実施をし、今回、24回目の大会を9月に迎えることになってございます。

また、これらの大会につきましの企画等につきましては、実行委員会を組織した中で、その中におきまして、例えばマラソンであれば陸上競技協会とか、ツーデーマーチについては歩こう会とか、それから関連する各団体、市町村からなる実行委員会をもちまして運営に当たっております。

その中におきまして、総務部会、観光部会、それから競技部会の3部構成の中で、そういう企画立案を行っているところであります。

○議長（千葉 薫君） 下道議員。

○9番（下道英明君） ありがとうございます。

マラソン、スポーツ観光というのは最近、非常に人気というのですか、スポーツツーリズムとも言いますが、非常に盛り上がりになってきておりまして、その中で洞爺湖マラソンに限定させていただきますと、私もちょうどマラソン趣味で道内とか道外とか走ってまいりまして、2007年の東京マラソンなのですけども、第1回目当たって42.195キロ走ってきたのですけれども、そのときちょうど応募者が7万7,000人いました。それで、当選した方が2万5,000人という形で、これはフルマラソンですけども、あと5,000人がちょうど10キロ走ったのですけれども、2008年も2年目連続走ろうと思って申し込んだのですが、7万から今度は13万人に応募者がふえました。

そしてまた、2009年には22万人までいきまして、去年、おととしと大体27万人から29万人、人数は3万人しか走らないのですけれども、参加費用は1万円とかなり高いのですけれども、そういう中で、今マラソン自体が一つの観光の目玉になってきていると、そういう現状がございまして。

そういう中で、最近のランナーの動向を見ますと非常に健康志向の高まりから非常にふえていたり、女性ランナーがふえてきていると、そういう中でやはり洞爺湖マラソンもぜひ一生懸命もっと拡大できなのかなと、当然、それはボランティア等の人数、あるいは警察の十分な御理解がなければ無理だと思うのですけれども、まず最初に、大体、平均ここ直近の五、六年の洞爺湖マラソン、直近でもなくても結構なのですが、洞爺湖マラソンのボランティアの総勢というのはちょっとお伺いしたいのですが。

○議長（千葉 薫君） 佐野洞爺湖温泉支所長。

○洞爺湖温泉支所長（佐野 正君） 正確な数字、ちょっと資料持ってきてございませんけれども、ボランティアの関係につきましては地元の自治会を初めとして、婦人団体なり、文教さんなり、体協さんなり、それから近隣のそういう方々等のお手伝いをいただいておりますし、虻田高等学校、それから洞爺高校等含めまして、おおよそ800名前後になろうかと思っ

ております。

○議長（千葉 薫君） 下道議員。

○9番（下道英明君） ありがとうございます。大体800名ぐらいなのですね。

私はやはり、夢として、例えば洞爺湖マラソンといったら温泉地区と洞爺地区と壮瞥で三つのエリアでやっているということでありますけれども、例えば本町地区ですとか、JR洞爺駅からそれをスタートにして、清水三豊のトンネルを高低差がありますから、陸連の登録になるかどうかわかりません、正式な認定コースになるかどうかわかりませんけれども、やはり洞爺湖町が一体となって洞爺湖マラソンを進めていくと、そういう中で、ボランティアにしても何も町内の人だけではないと思うのです。例えば、洞爺湖マラソンのジャンパー着てスタッフとか背中に入れて、これは西胆振の方たち、特に西胆振の中で大きなマラソンというのはありません。あるのは、伊達ハーフマラソンと洞爺湖マラソンだけと。ほかの地域、道内の中でいくと、結構、函館ですとかいろいろなところでかぶって実際、行われております。

そうすると、陸連の御協力も得ながら、例えば伊達ですとか、登別ですとか、いわゆる広域観光圏の人たちの走る人、走りたい人、また応援する人、サポートする人も巻き込みながら、例えば1万人フルマラソン、そしてハーフマラソンの復活、特にハーフは例えばの御協力を得ながら水の駅からスタートするとか、そういった形でもう1日でなくても、2日間、絶対2日間洞爺湖にいなればいけないよとか、スタートも9時40分とか9時50分ではなくて11時ですとか、できるだけ帰させないような、そういう仕掛けというのですか、こういうのもやはり必要だと思うのです。そういうものを現実問題としてできないのかなと。

マラソン走っている人なら専門誌があるのですけれども、その中で走ってみたいベスト10とあるのですけれども、いつも大体、洞爺湖マラソンとかは10番とか11番なののですけれども、やはり自分も走って好きなものですから、走ってみたい全国ベスト5とか、この洞爺湖マラソンが、そのためには一番大事なことは今、所長おっしゃったようなボランティアの人数のさらなる確保です、それと警察の交通規制についてですけれども、そういった整備を今後させていきながら、ベスト5を目指すような夢ができないのでしょうか。

○議長（千葉 薫君） 佐野洞爺湖温泉支所長。

○洞爺湖温泉支所長（佐野 正君） 将来的には、今、言ったように大規模な大会といいますかは実施したいと、そういうふうには考えております。

ただ、今言われたように、すぐに例えば6,000、7,000という大会にするのであれば、ハーフマラソンと、それからフルマラソンの今の5時間制限を1時間延長することによって、それは可能だとは私は思っておりますけれども、大規模な大会にすることによって、一番うちの問題になっているのは駐車場の関係とか、それから主会場の関係とか、当然、コースの設定等も考えなければいけないというような、そういういろいろな諸問題がありますので、それらを一つ一つ片づけた中で、そういう大会に向けてこれからも企画等を進めてまいりたいと、そう考えております。

○議長（千葉 薫君） 下道議員。

○9番（下道英明君） ありがとうございます。

諸問題等をいろいろある中で、一つ一人クリアしながら大きな大会にしていければと思うのですけれども、そういう中でだれが今後、そういった大会を仕切っていくのかという形に話を最後のほうに進めてまいりたいと思います。

その中で、スポーツ観光、スポーツツーリズムですね、今、支所長おっしゃったようにいろいろな諸問題が出てくると、そうすると例えば札幌市の場合ですと雪祭りの場合ですと、もう特別プロジェクトチームがごございます。東京マラソンにしても、都庁の場合、人数おりますけれども、そこの中でもスペシャルな特別なプロジェクトがごございます。

そういった点で、事マラソンだけには限らないのですけれども、こういったスポーツ観光を通じて、各種スポーツ大会を誘致したり、また既存の大会運営の向上というのですか、こういったことも大事になってくると、市民スポーツ大会ですとか、あるいは旅行をしながらスポーツを楽しむというような人もたくさん出てきております。

旅行会社なんか、大手の旅行会社もスポーツを活用した地域活性化と、あるいは交流機会を拡大に結びつけるために、スポーツ観光に取り組んで強化していくというのが行われてきております。

スポーツ観光の普及に向けて交流機会を膨らましていくわけなのですけれども、そういった中で、観光であれば観光振興ディレクター当町にありますけれども、スポーツ振興ディレクターのような、そういったこれは将来的になると思うのですけれども、そういったものを当町として委嘱していくとか、何かしていくとか、そういうお願いとか、そういうプラン、創設といのうは可能なかどうか、お伺いしたいと思います。

○議長（千葉 薫君） 佐々木観光振興課参事。

○観光振興課参事（佐々木清志君） ただいまの件でございます。

国や道でのスポーツツーリズムということで、観光分野における新たな戦略ということで位置づけておりまして、2010年度より官公庁においてはスポーツ観光ポータルサイトの開設、今、議員おっしゃいましたスポーツ観光マイスター制度、現在、数名おりますけれども、これらについては国のレベルでございますので、オリンピック選手なり、現役引退選手というものは今、始まっております。

北海道におきましても、北海道運輸局、北海道庁、北海道観光振興機構が中心となりまして、北海道スポーツ観光連絡会議というのが昨年、設置されましてこれから協議になるというふうに聞いてございます。

昨今、議員もおっしゃいましたように健康志向と相まっておりまして、北海道も皆さんも御存じで涼しい、道内には環境面でグラウンド等の施設がすばらしい、スポーツ合宿や大会誘致に各町村が努力しているところでございます。

うちの町につきましても、観光協会やNPO洞爺にぎわいネットワークというのがございまして、そこが中心となりまして、昨年来、洞爺湖100年事業を契機にいたしましてスポー

ッ大会、特に少年少女でございます文化活動のワンストップサービス、会場、宿泊所、お昼御飯、交通、移動手段までをすべて面倒を見るというサービスを始めたところでありまして、昨年は洞爺の宝田のサッカー場を中心に、札幌中心ですけれども3大会で1,000名の宿泊を確保、高校生の演劇が15名で1,015名の確保、ことしにつきましても3大会、今予約が入ってきてまして、そのほかリトルシニアの野球大会というのも約300名ほど入ってきております。

このワンストップサービスがここ2年目になりまして、着実に定着してきているかなというふうに考えております。また、ことしですけれども9月上旬、今現在、誘致進めておりますけれども全日本ラリー選手権第11団でございます中の第6団目が洞爺湖周辺で開催されるように今、誘致をして準備を進めておりまして、3日間で2,000名ほどのイベントではないかということで、洞爺湖周辺でのスポーツイベントとして新たなものが期待されていると。

また、地元の観光協会におきましても、スポーツというのは大切だということの意識がございまして、現在、北海道フットサルチームナポというチームがございまして、ここの胸に洞爺湖という漢字なのですけれども、この人たちが活動をしておりまして、もちろんスポンサー広告ですか、それらは観光協会が自腹を切ってございましてけれども、この人たちがいろいろな全道大会、道内各地を転々とするによりまして、広く洞爺湖をPRできものと考えております。

また、NPOの洞爺にぎわいネットワークにおきましては、2月には豊浦ドームでの少年サッカー大会、3月には伊達で開催されます古くからやっております春一番の少年サッカー大会、今回、皆さんも御存じのように有珠の中学校あたりが使えないというような形で、虻田高校のグラウンドを借りる、または壮瞥の会場を借りる、4月には地元の洞爺湖温泉小学校のグラウンドを借りるなど、いろいろと御苦労なさって、洞爺湖温泉の宿泊確保に努めるということで、地位や組織の枠を超えて一生懸命努力されているということでございます。

今後ですけれども、この周辺でございまして雪解けが早い、それと雪が降るのが遅いという利点がございまして、これらを活用しまして、積極的に新たな観光における誘致活動を展開していきたいと考えております。

ただ、現在ですけれども、小学校、中学校レベルでの体育対象とした誘致でございまして、大学社会人というのは施設整備面等につきましては、若干の不備になってございますが、現在、先ほども言いましたように伊達市有珠中学校におけます全天候型グラウンド、でございましてけれども、ごあいさつをしておりましてNPOさんから行きますと積極的に活用してくれという御意見を市のほうからいただいているということで、大変、期待しているところでございます。

最後になりますけれども、スポーツディレクターということについてですけれども、これらは現在は比較基準というのは全くないということでございます。今、私どもがやっているのは観光部門での経済活動を中心で、洞爺湖温泉に何とかお客様を入れていただきたいという取り組みでございましてけれども、この道のスポーツ観光協議会等の内容を得まして、地元教育委員会、体育協会との連携を含め、積極的に誘致活動を展開して、洞爺湖温泉の活性

化につなげてまいりたいと思っております。

以上です。

○議長（千葉 薫君） 下道議員。

○9 番（下道英明君） ありがとうございます。

スポーツによる地域活性化の直面している課題というのは、過疎化と高齢化等が挙げられると思いますけれども、また一つの側面としてスポーツ振興というのは住民、町民の健康進とか、交流促進をするという利用があると思うのです。

そういった点で、今、個々の動きをやはりまとめていく、そういうディレクターというのが、今後、特に洞爺湖町の場合、観光立町にやはり軸足を置いているわけですから、そういった点で、観光庁のほうも、今、参事がおっしゃったようなスポーツツーリズムの推進ということで動き始めておりますので、そういった点で、今後の指導、運営する人材の育成、そしてまた、全体的な運営ができる人がこれから継続的に必要であり、育てていく必要があると思いますけれども、ことしは無理でございますが、来年度以降、ぜひ政策予算の中で、町長のほうもご検討いただけないのかと。また、このスポーツツーリズムに関するお考え等をお聞きして、最後の質問とさせていただきます。

○議長（千葉 薫君） 真屋町長。

○町長（真屋敏春君） 職員の限られた人員の中で、スポーツディレクターなるものが本当にできるのかどうかということについては、いま一度検討させていただきたいというふうにも思っております。

ただ、今、観光課の参事が申したとおり、いろいろの面で、今、観光面で努力をしていたいております。ことしも自動車のラリー、あるいは来年はツーデーマーチが24回を迎える記念すべき大会にもなります。

そんな面からも、これから洞爺湖町、いろいろな面でイベントを展開しておりますが、人材も含めて、何とか大会が成功裏にできるように、これからは誘致、あるいは活動について頑張っていきたいというふうに思っております。

○議長（千葉 薫君） 下道議員。

○7 番（下道英明君） ご答弁ありがとうございます。ひとつぜひご検討いただきたいと思います。

これで、私の一般質問を終わらせていただきます。ありがとうございました。

○議長（千葉 薫君） 以上で、9 番下道議員の質問を終わります。

本日の一般質問は、これで終了いたします。

◎散会の宣告

○議長（千葉 薫君） 以上で、本日の日程はすべて終了いたしました。

これで、本日は散会いたします。

ご苦労さまでございました。